様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　５ 月 ３１ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：若手研究
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ１３１８４

研究課題名（和文）現代日本語における「名詞の助数詞的用法」の実態解明を目指した雑誌コーパスの構築

研究課題名（英文）Creation of a Magazine Corpus for Analyzing Nouns Used as Classifiers in Modern Japanese

研究代表者
東条　佳奈（TOJO, Kana）

大阪大学・大学院人文学研究科（人文学専攻、芸術学専攻、日本学専攻）・講師

研究者番号：２０７８２２２０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、数詞に続いて用いられる名詞である「名詞の助数詞的用法」をコーパスより収集し、実態を明らかにすることを目的としたものである。助数詞はフォーマルな書き言葉に多いが、経年的に調査可能な資料は新聞以外にないため、本研究では新たに、BCCWJに収録されている刊行年とは異なる雑誌コーパスを作成した。また、並行して、「名詞の助数詞的用法」の特徴の分析とを行った。
雑誌コーパス作成については、2015年発行の雑誌についてサンプリングを行い、85万字のプレーンコーパスを作成した。特徴の分析については、BCCWJとの比較のほか、指示機能・個別の語に焦点を当てた調査・名詞句としての特徴について分析を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義
数詞に続いて用いられる名詞には、「4項目挙げる」の「項目」のように、助数詞として定着している語（準助数詞）のほか、「4閣僚を更迭」の「閣僚」のように、ものを数え上げるためには使われない語（擬似助数詞）も含まれる。本研究ではこれらを「名詞の助数詞的用法」として包括的に扱うことで、従来の研究ではほとんど扱われなかった新たな数量表現である擬似助数詞の語彙的・構文的な特徴を示すことができた。また、BCCWJよりも新しい発行年の雑誌を対象として電子化を行った。計画当初よりも小規模となったため、単純な比較は難しいが、語彙表や資料の特性の公開を通して、言語資源の蓄積に貢献することが可能になると考えている。

研究成果の概要（英文）： The objective of this study was to examine the nouns used as classifiers. These nouns are commonly used in formal written language, but there are no other sources that can be studied over time, other than newspapers. Therefore, a new corpus of magazines was created for this study, which differs from the year of publication included in the BCCWJ. In parallel, an analysis of the characteristics of 'nouns used as classifiers' was also conducted.
For the creation of the magazine corpus, a plain corpus of 850,000 characters was created by sampling magazines published in 2015. In the feature analysis, in addition to a survey of the journal corpus in the BCCWJ, In addition, an analysis was carried out of the directive function within sentences, an analysis by semantic domain to which individual words belong, and an investigation focusing on how words that do not function as numeral classifires are used as noun phrases.

研究分野：現代日本語学

キーワード：名詞　助数詞　コーパス　準助数詞　擬似助数詞　雑誌　新聞

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

（１）研究課題申請時における背景

日本語ではものを数える時に「本 1 冊」のように、数詞の後に助数詞を伴う。助数詞の研究は、認知意味論的研究や文法論的研究をはじめ、歴史言語学、方言学、発達心理学、音声学・アクセント論など多岐にわたる分野で多くの蓄積がある。助数詞は「1 冊」の「-冊」のように、数詞と切り離してしまうと単独で使えないもの（＝接尾辞）と、「3 項目」の「-項目」のように、数詞と切り離しても単独で使える語（＝名詞）とに分けられるが、これまでの助数詞研究は、数詞と切り離せない接尾辞を助数詞とする前提で行われてきた。だが近年、数詞に続く名詞を助数詞と捉え、主な研究対象とする論考も増加してきた（伊藤 2004、田中 2015 等）。

助数詞は、数える対象と共に用いられるため、新たな概念が生まれれば、それを数えるための助数詞が必要になり、新規に単位が作られたり、新たに名詞から助数詞へと取り入れられたりする。数詞に続く名詞を主な対象とする研究の多くは、名詞が新たな助数詞として定着するプロセスに着目したものであり、名詞の希薄化という点で文法化とも関わる議論である。しかし、個別の名詞に着目した研究は多い（伊藤前掲, 田中 2016 等）ものの、どのような名詞が助数詞として用いられているのかという全体像を捉えようとする研究（成田 1990,東条 2014 等）は少ない。

一方で、数詞に続く名詞の中には、「4 閣僚を更迭した」の「-閣僚」のように、そのものを数えるためには用いられないにも関わらず使われる、助数詞を模した擬似的な表現がある。こうした表現は、名詞性を強く残しており、従来の助数詞の枠組みに入らず、助数詞研究の対象にはされてこなかった。また、名詞研究においても、数詞に続くことで「助数詞」と見なされ、研究の対象から外されてきた。報告者はこれまで、こうした助数詞を模した擬似的な表現を「擬似助数詞」とし、大規模データに基づく実証的な研究によって、これらが多く新聞に使われることを示してきた。しかし、現代語の数量表現の体系を把握するためには「擬似助数詞」を除外せずに実態を調査し、用法や機能を明らかにする必要があるという課題があった。

（２）研究課題申請時における動機

報告者はこれまで、数詞に後続する名詞（本研究における「名詞の助数詞的用法」）を「名詞型助数詞」と呼び、実態解明のための研究を行ってきた。まず、新聞コーパス（CD-毎日新聞データ集）を用いて、378 種の名詞型助数詞の語例を収集し、実態に即した分類と整理を行った。そして「名詞型助数詞」が（a）容器型助数詞（「納豆 2 パック」の「-パック」のように、容器を目安にして集合物や連続物の量を示すもの）（b）準助数詞（「3 項目」の「-項目」のように、「1 項目、2 項目･･･」とその名詞を用いて数え上げることができるもの）（c）擬似助数詞（「4 閣僚」の「-閣僚」のように、その名詞を数え上げるためには用いることができず、文章の中で臨時的に数詞と結びついた見かけだけの助数詞）の 3 種類に分けられることを示した上で、特に、前に来る数に制限があるか否かという「可付番性」の有無によって区別される（b）準助数詞と（c）擬似助数詞について、研究を進めてきた。「準助数詞」は抽象的関係を示す分野、「擬似助数詞」は人物・機関を示す分野に多いという意味領域上の相補的な分布のほか、とる構文の型・前接する数詞のバリエーション・経年的に見た場合の使用頻度などの点にも対照的な特徴があることを、大規模データに基づく実証的な研究によって示してきた。しかし、報告者のこれまでの研究は、調査資料を新聞に限定していたため、その理論的一般化にはなお不十分な点が残されていた。特に「擬似助数詞」については、それが新聞以外の資料にも観察される表現であるかは検証すべき課題であった。というのも「擬似助数詞」は、新聞の見出しのようないわゆる圧縮的文章に多く、また、見出し文以外でも「佐藤、田中、鈴木の 3 容疑者を逮捕」のように、いくつあるかという数量と、それらがどんな属性であるかを同時に示すような定型的な用法が顕著だったためである。しかし、この傾向が「擬似助数詞」自体の持つ特徴であるのか、新聞という言語資料による特徴であるのかは、判断できず、また、従来の助数詞体系を補う役割をもつ「準助数詞」に対し「擬似助数詞」の役割はいまだ明確になっていない。これらがなぜ生まれるのか、新聞以外の文章ジャンルでも用いられるのかという疑問から、本研究の着想・動機を得た。

２．研究の目的

１で述べた背景と動機をふまえ、本研究では、その名詞がものを数え上げることができるか否かに関わらず、数詞に続く名詞をすべて「名詞の助数詞的用法」として捉えた。そのうえで、課題申請当初には、「複数のコーパスから抽出した「名詞の助数詞的用法」について、共時的・通時的比較を通して、特徴および成立・拡大過程を明らかにすること」を目的とした。そして、この目的の達成のために、Ⅰ）新聞との比較のための雑誌コーパスの構築、Ⅱ）「名詞の助数詞的用法」の特徴と文章特性の考察、Ⅲ）「名詞の助数詞的用法」の成立過程の分析、Ⅳ）助数詞研究・名詞研究における「名詞の助数詞的用法」の位置づけを明らかにする、という小目標を予定として立てた。

３．研究の方法

（１）雑誌コーパスの構築

本研究では雑誌コーパスの構築を目標の一つに立てた。雑誌は『現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）』に収録の 2005 年のデータ以降、最新の資料として検索し得るものがない。一方、国立国語研究所の雑誌調査としては 1956 年と 1994 年の資料があり、これらは申請すれば閲覧・利用できる。そこで、2015 年および 1985 年の雑誌資料を揃えることで、1985 年・1994 年・2005 年・2015 年とほぼ 10 年ごとに 40 年分を経年的に観察することが可能になると考えた。

そこで、本研究の申請時点では、まずは 2015 年の雑誌資料を収集・電子化し、その後 1985 年発行分についても同様に行うことを計画していた。

しかし、作業開始後に、冊子自体の入手方法や文字化の費用、作業量といった面で、当初の予定通りの研究実施は困難であると判断した。そのため、研究計画も大幅に変更し、本研究では共時的な調査のみを行うこととし、以下のような方法で雑誌コーパスの作成を試みた。

【A】雑誌の選定と収集

国立国語研究所（2005）を参考に、「総合・文芸」「女性・服飾」「実用」「趣味・娯楽」「芸術・科学」の 5 分野より、休刊・廃刊したものや電子書籍に移行したものを除いた 48 種の雑誌を選定した（表１）。それぞれの雑誌について、2015 年 1 月、4 月、7 月、10 月刊行分、計 181 冊を収集した。該当月が入手できなかったものについては、前後 1 か月の範囲で探し、それでも入手できなかったものについては入手不可のものとして扱った。

【表１】選定した雑誌一覧

総合・文芸（6誌）	女性・服飾（12誌）	趣味・娯楽（18誌）		芸術・科学（8誌）
Begin	CHANTO	Airline	月刊バスケットボール	Newton
月刊BIG tomorrow	ESSE	CAR Graphic（CG）	月刊自家用車	カメラマン
小説新潮	FIGARO Japon	CARトップ	碁ワールド	音楽の友
世界	LEE	Daytona	天文ガイド	歌劇
読楽	MEN'S CLUB	GOLF digest	優駿	芸術新潮
文芸春秋	MORE	Ski Journal	旅行読売	現代詩手帖
	Soen（装苑）	Tennis classic Break		短歌
実用（4誌）	With	Volleyball		俳句
プレジデント	ミセス	つり人		
安心	家庭画報	パチスロ必勝ガイド		
栄養と料理	婦人画報	モーターサイクリスト		
日経マネー	婦人公論	ラジコン技術		

【B】サンプリング・電子化の手順

1 冊ごとにページ数を計算し、関数を用いて全体の 1/16 になるように抽出するページを定めた。抽出したページが写真のみで文字が全くない場合は、その分のページは削除し、1 語でも語があれば抽出する、という手法をとった。

語彙の使用を見るためには文脈が必要と考え、佐竹（2001）を参考に、エリアサンプリングをとることを目指した。各ページを縦 5 マス×横 3 マスに 15 分割し、関数を用いて、上半分の範囲と下半分の範囲から 1 マスずつ（合計 2 マス）の抽出範囲を決め、その範囲に最も近い箇所の文章を見出しもしくは段落ごと（センテンスの開始から終わりまでを）収集した。小説など、場面の切れ目が分かりにくいものについては、前後の文脈を見てひとまとまりと思われるところを収集した。後からどの範囲を収集したのかを判断しやすくするため、電子化の際に分割マスごとに座標記号を付し、ページ数と併記した。

以上の手順を終えた後、業者にテキスト化を依頼した。15 区画の範囲からは、原則上から下、左から右という文字の流れに沿って入力するように指示した。また、見出しと思われる文の冒頭には記号を付し、本文と区別した。総計 858,274 文字分の電子化を行った。

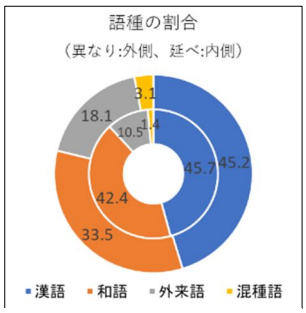
（２）「名詞の助数詞的用法」の分析

自作雑誌コーパスの作成作業と並行して、現存のコーパスを対象とした、「名詞の助数詞的用法」の分析を行った。主に、①BCCWJ の雑誌レジスターにおける「名詞の助数詞的用法」の調査、②「準助数詞」と「擬似助数詞」の用法の比較に関する調査と分析、③擬似助数詞を用いた名詞句の特徴に関する分析に取り組んだ。①は BCCWJ を使用し、②と③については、CD-毎日新聞コーパスを使用した。

４．研究成果

（１）自作雑誌コーパスの概要と課題

3 節【B】の手法によりサンプリングを行った雑誌資料のうち、1 タイトルにつき 3 カ月分以上収集することができた 634,210 字（108 冊分）のテキストファイルについて、Web 茶まめを用いて形態素解析を施した。記号を除いた品詞別の語数を示したものが表 2、そこからさらに助詞・助動詞・固有名詞を省いた上で、語種別の割合を示したものが図 1 である。単純な比較はできないものの、BCCWJ の雑誌サブコーパスにおける語種構成比率（国立国語研究所 2013）と概ね同



【図 1】語種の割合

じ傾向にあるように思われる。また、雑誌の分野ごとに頻度上位の普通名詞を観察すると、ジャンルの特徴語と思われる語例が複数見られた（表 3）。母集団が不明であること、また、小規模のコーパスであり、当初の目論見であった「名詞の助数詞的用法」の用例もわずかであるという点で課題が残るものの、高頻度語の分析や見出し文の新聞との比較等の活用は可能であると思われる。

【表 2】品詞別語数および割合

品詞	語数	割合
名詞	95227	36.8
助詞	77506	30
動詞	33067	12.8
助動詞	23192	9
接尾辞	8695	3.4
形容詞	4396	1.7
副詞	4120	1.6
形状詞	4041	1.6
代名詞	2813	1.1
接頭辞	2444	0.9
連体詞	2005	0.8
接続詞	841	0.3
感動詞	335	0.1
計	258682	100

【表 3】雑誌のジャンル別頻度上位 15 位までの語例

総合・文芸	頻度	実用	頻度	女性・服飾	頻度	趣味・娯楽	頻度	芸術・科学	頻度
事	514	事	28	事	192	事	406	事	272
年	249	年	27	物	112	年	307	年	179
物	146	人	18	年	104	月	267	物	125
時	124	時計	16	感	89	円-助数詞	224	音楽	103
月	117	問題	13	人	85	日	172	月	101
人	110	大学	13	時	85	機	165	時	99
為	99	円-助数詞	13	月	81	時	150	句	94
自分	93	税	12	肌	74	物	128	日	94
日	81	社長	12	円-助数詞	74	為	124	人	83
中	80	企業	12	バッグ	70	エンジン	100	曲	79
今	77	英語	12	センチメートル	57	車	96	中	68
目	61	月	12	分	55	空港	96	指揮	67
度	61	方	11	今	54	モデル	95	演奏	66
前	59	為	11	ニット	54	県	91	詩	65
父	54	ブランド	11	為	52	価格	88	作品	64
声	54	メール	11	中	49	クラス	86	世界	63

（２）BCCWJ 雑誌レジスターにおける「名詞の助数詞的用法」の様相（東条 2020）

本分析では、これまで新聞資料を対象に収集されてきた「名詞の助数詞的用法」が他の媒体においても見られるかについて、新聞とは異なる書き言葉資料である BCCWJ の雑誌レジスターを対象に調査を行った。

東条（2014）が新聞を対象に行った調査結果と同様に、準助数詞は〈抽象的関係〉を示す意味分野に、擬似助数詞は〈人間活動の主体〉を示す意味分野に多いという結果が得られた。一方、語種の面では、新聞よりも外来語の占める割合が多く、雑誌のジャンルの影響が窺えた。準助数詞については新聞と共通する語例が多く見られたが、擬似助数詞では共通する語例はあまり見られず、汎用性や文脈依存の有無の違いが表れる結果となった。

また、雑誌のジャンルごとの調査では、ジャンルを問わず用いられる名詞と、専門性を反映したジャンル特有の名詞が見られたため、各ジャンルの特徴語なども抽出しながら、雑誌における名詞の助数詞的用法の比較を行う必要がある。今後、雑誌が扱う話題ごとの特徴をふまえた分析を行うことで、新聞で得られた結果とは異なる傾向が見つかる可能性があると思われた。

（３）個別の名詞の用法からみる「名詞の助数詞的用法」の指示機能

【A】「条件」と「容疑者」に関する分析（東条 2022）

数詞と名詞からなる複合名詞は、指示機能（代名詞的用法）を担うことが指摘されている（田中 2015）ことから、「準助数詞」「擬似助数詞」はいずれも指示機能をもつことが予測される。そこで本項では、東条（2014）の立場と用語を踏襲し、「準助数詞」と「擬似助数詞」の文章中における指示機能（代名詞的用法）の差異を探ることを目的とした調査を行った。具体的には、準助数詞の例として「-条件」、擬似助数詞の例として「-容疑者」という語を取り上げ、新聞文章における両者の現れ方を比較した。調査の結果、①「-条件」には、内訳の列挙との共起、単独での使用、複合語の一部、指示語に続く例などが見られたが、「-容疑者」では、内訳の列挙との共起と単独での使用に偏ること、また、内訳の列挙の仕方においても、「-条件」と「-容疑者」には指示対象や機能に違いが見られたこと、③単独での使用では、「-条件」は見出し文、本文に関わらず用いられるのに対し、「-容疑者」は多くが見出し文に用いられるといった、文章内での位置にも使用差があること、④「-条件」にのみ、複合語の一部となる例や指示語に続く例が見られたこと、などを示した。上記より、「-条件」に比べ、「-容疑者」は極めて限定的な用法であるとわかった。しかし、これらの差異は、抽象名詞と具体名詞の差によるものという可能性もあるため、同じ意味領域内の準助数詞と擬似助数詞の比較が課題となった。

【B】「選手」と「投手」に関する分析（東条 2022b）

「準助数詞」と「擬似助数詞」が、いずれも“〈人物〉を表わす名詞”という共通する意味領域の語である場合、両者にどのような差異があるのかについて、「-選手」と「-投手」という語を対象に調査を行った。また、既に調査がなされている「-容疑者」や「-条件」とどのように異なるかについても検討した。その結果、①「-選手」、「-投手」ともに、単独での用法が最も多く、「-条件」にあったような指示語との共起は「-選手」にはほとんど見られないこと、また「-容疑者」と異なり、「-投手」は複合語の一部の例が多いこと、②「-投手」のほうが「-容疑者」よりも出現形式のバリエーションが豊かであること、③単独形式においては、「-投手」は、定型的表現として用いられている可能性があること、④指示対象の内訳を列挙する形式においては、「-選手」「-投手」に目立った相違点は見られないこと、などがわかった。

「-選手」という具体的な人物を表す名詞が準助数詞として浸透しつつあること、また、擬似助数詞である「-投手」が「-容疑者」に比べて表現のバリエーションが豊かであることの要因としては、試合の結果を報道するという文脈では「得点をどれだけ獲得したか」が重視され、数に言及することが多くなることが考えられた。一方で、指示語との共起がしにくい点については、そもそも「2 選手」「3 投手」という表現の時点で、指し示す対象について、誤認のない的確な指示を行っているため、重複して指示語を使用する必要がないためだといえる。「選手」「投手」「容疑者」において指示語と共起する例が極めて少ないのは、〈人物〉を表わす名詞を用いることで、助数詞「-人」で表すよりも、さらに個体性が高くなるためであると考えられる。

（4）擬似助数詞を用いた名詞句の分析（東条 2024）

本調査では、「A,B,C の 3〇〇」といった列挙形式の「NP1 の擬似数量詞」について、NP1 と擬似数量詞が意味的に一致するか否かという観点から違いを分析した。その際、数詞部分・名詞部分のどちらが必須でどちらが補助的なのかという点から、両者を「数詞必須タイプ」と「数詞任意タイプ」とに区別し、他の名詞句や数量詞構文との差異を分析した。結果は以下のようにまとめられる。

①「数詞必須タイプ」は、NP1 と擬似数量詞が意味的に一致するものであり、NP1 で人名の列挙を示し、擬似数量詞部の名詞でそれらがどのような集合であるかという属性を表す表現である。これは形の上では修飾要素（NP1）と被修飾要素（NP2）と分けられるが、意味的にはどちらが主要部か判断がしづらい、主要部同格型に近い。一般的な名詞句では生産性があまりない表現である一方、数詞がなければ成立しないため、「数詞」が必須の要素であり、数量詞構文でもよく見られる型である。「-人」を用いた数量詞ではなく、名詞を用いた擬似数量詞が NP2 を担うことで、足りない情報を補足する役割を果たしており、個人名（読み手にとって未知の人物）に言及することが多い新聞報道に適した表現であると考えられる。

②「数詞任意タイプ」は、NP1 により「擬似数量詞」が修飾される、一般的な名詞句の性質を備えるものとなる。このタイプでは数詞を省略しても意味的に成立し、また、被修飾部分自体を省略しても換喩のような拡大解釈が成り立つ文もある一方で、助数詞を用いた数量詞に置き換えると文として不適格になることから、数量の情報自体が任意の表現と考えられる。数詞を用いることで、より具体的になるという利点はあるが、無くても不適格ではないという点で、数詞は補助的に働いていると考えられる。

③「数詞必須タイプ」に比べ、「数詞任意タイプ」は数が少ない。これは、読み手にとって既知の名詞の NP1 が列挙されている場合、数量をとりわけ示さなくとも文が成立するという点が影響すると考えられる。読み手にとっての未知情報である個人名には、必ずそれらがどのような集まりなのかが言及される。そのため、両タイプの用例数に差が生まれたと考えられる。

このように、擬似助数詞は、数量詞構文特有の表現にさらに名詞を足し、情報量を足すことができる側面と、名詞句に数詞を足すことで、より具体的に情報を加えることができる側面をもつ表現であることがわかった。

本研究課題では、「名詞の助数詞的用法」、特に、擬似助数詞の実態解明のため、雑誌コーパスの構築と、並行して同表現の特徴に関する分析を行った。今後は、経年的調査のほか、作成した言語資料の拡充および有効な活用についても、引き続き継続して取り組んでいく予定である。

＜引用文献＞

伊藤紀子（2004）「形状類別詞「粒」の用法とまとまり性」西光義弘· 水口志乃扶編『類別詞の対照』くろしお出版.
国立国語研究所（2005）『現代雑誌の語彙調査―1994 年発行 70 誌』国立国語研究所報告 121.
国立国語研究所（2013）『『現代日本語書き言葉均衡コーパス』語彙表 ver.1.0 解説』
佐竹秀雄（2001）「研究対象の量とサンプリング」『日本語学』20(5),74-83.
田中佑（2015）『近現代語における新たな助数詞の成立と定着』筑波大学人文社会科学研究科博士論文.
田中佑（2016）「外来語名詞「パターン」の助数詞への進出」『言語学論叢』35,1-14.
東条佳奈(2014)「名詞型助数詞の類型―助数詞・準助数詞・擬似助数詞」『日本語の研究』10(4),16-32.
東条佳奈（2020）「BCCWJ における「名詞の助数詞的用法」について―雑誌資料を例に―」『待兼山論叢 日本学編』54,65-79.
東条佳奈（2022a）「文章における「名詞の助数詞的用法」の指示機能―「-条件」と「-容疑者」を例に―」斎藤倫明・修徳健編『語彙論と文法論をつなぐ　言語研究の拡がりを見据えて』129-152.
東条佳奈（2022b）「人物を表わす名詞の助数詞的用法―「選手」と「投手」を例に―」『藝文研究』123(1),92-108.
東条佳奈（2023）「第 5 章「NP1 の擬似助数詞」型名詞句の分析―列挙形式に注目して―」斎藤倫明・修徳健編『日本学研究叢書　日本語語彙論』102-125.
成田徹男（1990）「名詞と同形の助数詞」『都大論究』27,1-8.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 東条佳奈	４．巻 1
２．論文標題 第5章　「NP1の擬似助数詞」型名詞句の分析―列挙形式に注目して―	５．発行年 2024年
３．雑誌名 斎藤倫明・修徳健編『日本学研究叢書　日本語語彙論』	６．最初と最後の頁 102,125
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 東条佳奈	４．巻 123巻1号
２．論文標題 人物を表わす名詞の助数詞的用法―「選手」と「投手」を例に―	５．発行年 2022年
３．雑誌名 藝文研究	６．最初と最後の頁 121-137
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 東条佳奈	４．巻 1
２．論文標題 文章における「名詞の助数詞的用法」の指示機能―「-条件」と「-容疑者」を例に―	５．発行年 2022年
３．雑誌名 斎藤倫明・修徳健編『語彙論と文法論をつなぐ―言語研究の拡がりを見据えて―』ひつじ書房	６．最初と最後の頁 129-152
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 東条佳奈	４．巻 54
２．論文標題 《報告》BCCWJにおける「名詞の助数詞的用法」について―雑誌資料を例に―	５．発行年 2020年
３．雑誌名 待兼山論叢　日本学篇	６．最初と最後の頁 65，79
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 東条佳奈
２．発表標題 雑誌コーパス作成の試みー2015年の資料をもとにー
３．学会等名 言語資源ワークショップ2023
４．発表年 2023年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関